

平成十九年度「花のまわりみち」

木村 里風子 選

特選

(三句)

「特選一席」

厨ごと今日は放りて花の径

山田 ともこ

(評) 待望の花のまわり道の初日、毎年この日を待っていた気持が今日は放りてによって伝わってくる。何が何でも桜の花を見たい作者の昂りがある。

「特選二席」

車椅子共ども落花浴びにけり

住田 祐嗣

(評) 車椅子にも、乗っている人にも、押している人にも、まわりにも、落花しきりである。正に共どもである。

「特選三席」

ランドセルカタカタ花の下通る

東 京子

(評) ランドセルの大きさ、背をはみ出した大きさ、カタカタはランドセルの中味が少ない、教科書が少ない一年生、筆入れが音を立てる。カタカナが妙な味を出した俳句である。

入選

(五句)

スカートを広げ童女の花筵

河村 幸子

鬱金てふ花へ真青き朝の空

亀井 朝子

卒寿なる母に紅さす鬱金かな

嶋治 久美子

頼寄せて花の香を確かむる

山岡 祥子

仏の名土地の名前や花の径

江見 巖

佳作

(二十五句)

身を反らせ見上ぐ鬱金の桜かな

中植 勝己

百円の図案の花に出会ひけり

渡辺 義昭

佇ちつくす句帳に花のふりかかる

吉岡 昌文(雅文)

花のみち巡りて休み又巡る

竹本 君代

雪洞の点りて花の景新た

斎藤 金二

車椅子押す手に肩に花ひらひら

梶本 操

夕空に溶けゆく鬱金桜かな

中植 紀子

花ごろも妻新しき帯締めて

神波 瑞江

八重桜枝の隙間の空遠し

岡村 みきえ

銭造る夜業のあかり遅桜

谷口 敬誠

雪洞に灯ともし雨の桜道

松井 哲夫（福朗）

掬ひては花くづ飛ばす幼かな

戸谷 朝子

花のみち出払つてゐる車椅子

野津 訓子

青く咲く御衣黄と言ふ花も八重

宮本 光子

碧天の造幣局の花見かな

豊嶋 睦

老の身を流れにゆだね花の冷

北村 弘明

たちどまるたびに散りたる桜かな

村越 ゆかり

車椅子に目線合はせて桜観る

富森 喜美子

携帯にはみ出る八重の房重し

隠塚 親子

桜散る姑の歩みに力満つ

兼 千晴

古木には古木の構へ花咲きぬ

清家 美保子

いつの世も美し哀し花の色

高原 征之

あれこれとカメラはみ出す桜かな

中島 啓一（啓伯）

学校の帰りに友とお花見だ

田崎 璃奈

さくらにかこまれしあわせになる

石丸 ひろ子

選者吟

紅手毬赤子の顔に綾の影

木村  
里風子